

第2回日本臨床検査学教育学会学術大会

加藤 亮二*

第2回日本臨床検査学教育学会学術大会が夏の猛暑の中、全国で50校を超える養成施設の教員、大学院生、学部生および臨地実習指導者を含む総数347名の参加者の下、平成19年8月27日(月)～29日(水)の3日間にわたり香川県民ホール(高松市)において盛大に開催することができました。高松市は毎年のことですが、この時期には水不足が続き、学会開催を断念することも一時考えたこともありましたが、天の恵みにより一夜にして解消され、無事に学会開催を迎えることができましたことは、今となっては感慨深い思い出となっております。

ご承知のように、臨床検査技師教育は戦後、職業教育の一環として開始され、資格取得を第一に、教育内容は浅く・広く、でありましたが、最近では学部化教育体制へと変貌を遂げつつあります。そこで、この分野の更なる発展を目指すには、そこで働く教員の意識改革はもちろんのこと、教育・研究能力をさらに磨くことが大切であります。また、学生にとってもこの分野を魅力あるものにするにはこの資格の社会的認知度を増やすことが重要でありますので、本学会ではこれらを念頭に、教員の『知的財産』を継続的に積み上げ、“臨床検査技師教育制度の目指すこれからの方向について”参加者と議論しました。

第1日目のシンポジウムでは、現状の“臨床検査技師教育の中身”に焦点を絞って、教育カリキュラム、臨地実習、卒業研究及び大学院教育の現状と問題点を再点検し、臨床検査技師教育のあるべき

第2回
日本臨床検査学教育学会学術大会
『知的遺産』
—臨床検査技師教育の更なる発展へ—

開催日：平成19年8月27日(月)～29日(水)
会場：香川県民ホール(高松五雲城内)
筑屋開始：平成19年5月7日(月)



Photo: 黒林公園

| | | |
|--------|---|--------------------|
| 大会長 | ： | 加藤 亮二 (香川県立保健医療大学) |
| 副大会長 | ： | 岩谷 康男 (大阪大学) |
| 実行委員長 | ： | 大塚 薫 (九州大学) |
| 司実行委員長 | ： | 西渡 美子 (高知学園短期大学) |
| 事務局長 | ： | 大西 英文 (昭和医歯薬専門学校) |
| 担当校 | ： | 香川県立保健医療大学 |

有責任中国法人
主催：日本臨床検査学教育協議会
後援：文部科学省 厚生労働省

第2回日本臨床検査学教育学会学術大会ポスター

き姿と今後の方向性についてまとめました。まず、教育カリキュラムについては森山先生(北海道大学)が全国の養成校を対象にアンケートを実施した結果、資格者養成プログラムに加えて、臨床検査技師に幅広い知識や他の資格を取得させるための教育が行われている現状を報告しました。臨地実習に関する報告では、佐藤先生(岡山済生会病

*香川県立保健医療大学生体分析検査学講座 katou@chs.pref.kagawa.jp

院)から病院で実際に行っている検査や現状を教員は良く把握し、学内実習と臨地実習の整合性と系統化を目指すことが望ましいとの発言がありました。大学教育における卒業研究については、奥村先生(信州大学)から学生に課題探求能力をつけさせるには、まず、指導教員の力量が重要であり、理系の教員と競争できる能力を有し、さらに具体的な研究技術能力を研鑽するには多くの研究論文の作成と同時に検査部や検査医学講座との協力関係が必要であると述べられました。また、このシンポジウムの最後のテーマである大学院教育の目指す方向については、戸塚先生(東京医科歯科大学)から臨床検査技師の大学院教育の歴史はまだ浅いが、“臨床検査学出身者であることが望ましい”とのニーズにつながる教育体制の確立が重要であり、臨床検査薬の開発等の業務をはじめ、この分野の中心的役割を果たせる人材育成を目指すべきとの発言がありました。

次のポイントであります『教員の資質向上への方策』については第3日目のパネルディスカッションで議論しました。渡辺先生(新潟医療)、寺平先生(藤田保健衛生短大)、池本先生(京都大学)、教育協議会から今井先生(東京文化短大)の4名の先生にパネラーとして話題提供していただきましたが、参加者との質疑を含め、短大・専門学校では入学者数の減少と入学生の基礎学力の低下が認められるようになり、その対策のために時間を費やし、研究面や自己研鑽に関わる時間に余裕がない実情が明らかになりました。結論としては各養成校の教員の置かれている立場にそれぞれの違いが認められますが、臨床検査技師養成に向けて、より資質の高い教員を目指すには、個人の努力は勿論ですが、養成校同士および日本臨床検査学教育協議会と弾力的な協力体制が必要であると確認されました。

更に、若手教員の育成を図るために『一流国際誌への投稿と研究方法』と題し、教員同士が気軽に話し合えるイブニングセミナーを開催し、現在、国際誌の査読を行っている斉藤先生(京都大学)、江本先生(群馬大学)、小林先生(済生会滋賀県病院)、岩谷先生(大阪大学)の4名の先生からホットな話題を提供していただきました。研究論文作

成のポイントや科学研究費受諾のためのノウハウ等の具体的な内容は今後の研究活動に向けて役立っているのではないかと考えています。

三つめのポイントとして、臨床検査技師の社会的認知度を増すための市民講座を開催しました。一般消費者や教員等の参加者の前で、多くの消費者が興味を持ち、実際に摂取されている健康食品や食品添加物についての安全性について、NPO 日本食品安全協会会長村理事長からお話をいただき、この分野における臨床検査技師の具体的な活躍をアピールしていただきました。特別講演では、変革の著しい医療制度の方向性と産学連携により新たに発生する最新の事例を諸外国の現状と併せて日経BP社編集長の宮田先生にお話をいただき、さらに、教育講演は個の医療や食育の重要性が叫ばれる中、これらの分野に臨床検査技師がどうやって関わるか等の考え方について大阪大学蛋白研究所の招聘教授松尾先生から興味ある話題を提供していただきました。この他、ランチョンセミナーでは飯沼先生から『肝がんを誘発するHBV変異とオカルトHBV感染』についての講演がありました。

四つめのポイントとして、今回の学会から教員同士が自由な意見を交換できる教育分科会を設け、各専門の2名の司会者の進行の下、各養成所で実施している学内実習の具体的な内容や使用機器等を紹介し合い、将来、学内実習の標準化を目指すための一助としました。一方で、臨床検査技師国家試験ガイドラインは作成されて早5年を過ぎようとしていますが、国家試験の出題内容に幾つかの偏りも散見されますので、内容の整理が必要な時期になってきました。これについても市村先生(天理医学)がとりまとめた内容が報告されました。

一般演題は臨床検査技師教育関連を中心に教員および大学院院生、学部学生等による107題がエントリーされ、3つの会場に分かれて活発な議論が行われました。末筆になりますが、この学会へのご後援をいただきました文部科学省、厚生労働省の両省ならびに香川県、関係諸団体に重ねて厚く御礼を申し上げますとともに一般社団法人日本臨床検査学教育学会の益々のご発展と教員各位のご活躍を祈念申し上げます。